
異世界の料理人

そら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の料理人

【Nコード】

N6498Z

【作者名】

そら

【あらすじ】

鈴野尊（27歳）、元料理人。

命の灯が消えかけた娘の命を救うには、女神ディオネが管理する「ディオネシア」という名の異世界で“俺ができること”をしなければならぬ。

娘とともに異世界に召還された尊は、異世界の食文化に愕然としつつも、食材を集めて元料理人としての腕を揮う

“俺ができること”とは？

女神の審判の日までの元料理人の異世界奮闘記！

・・・になるといいな！。初心者・ど素人ですので、アタタカイメ
デ、ミテヤツテクダサイ。遅筆になるかと思いますが、ごゆっくり
更新をお待ちいただければ幸いです。

プロローグ(前書き)

プロローグです。とっても暗いです。

プロローグ

1. プロローグ

白のパイプベッド、白の布団、白のカーテン。室内をほぼ白に統一されたこの病室でベッドに娘が横たわっていた。病室のカーテンは閉めているのだが、照明とカーテン越しの秋の日差しで明るい。俺は、病院に入院している娘に会うため、仕事の合間に抜け出してきたのだ。

「ばば・・・」

時々、うなされたように俺を呼ぶ。

「唯・・・」

俺は、娘をただ見ていることしかできない。

鈴野 唯。今年、幼稚園の年長になった娘。生まれてすぐに母親を失ったため、母親を知らない。非情な運命のもとに生まれた娘だけでなく、本当に良い子に育ってくれた。男手一つ育てた・・・と言えればカッコいいのだけれど、残念だが違う。娘を良い子に育てたのは、妻の母親、娘の祖母だ。祖母は学校の先生をしていたこともあるそうで、本当に厳しく、優しく、愛情をもって育ててくれたと思う。

その祖母もいない。昨年、唯の幼稚園入園を見届けると、まもなく亡くなった。もともと、心臓が悪かったらしく、体調を崩してからあっという間だった。

唯もその悲しみからようやく立ち直り、元気な娘の笑顔が見られたと思ったら、1年も経たずに高熱を出して倒れた。

原因不明

医者から聞かされた言葉はそれだった。突然、幼児が高熱を出すということは、知識として知っていたが、原因がわからないとなるとそつとも言っていられない。自宅療養1カ月、入院が5カ月にも及ぶ闘病生活で、ゆつくりと衰弱していく娘をただ見ていることしかできなかった。

思えば、俺の妻、幸も生まれつき体が弱く、子供の頃から高熱を出しては寝込んでいたという。妻と出会ってから、何度か熱を出して寝込んでいたことがあった。

しかし、これまで風邪をこじらせることもなく元気だった娘が突然高熱を出した時、不覚にも妻の姿をダブらせてしまった。それがいけなかったのか……。

俺は娘のために働くことしかできなかった。親もなく、孤児だった俺に頼れる親戚はいなかった。本当はいるのかもしれないが、産みの親を知らない俺には分からない。妻の幸も父親を早くに亡くし、母子家庭だったという。そちらの親戚もなく、天涯孤独に近い。

働いて入院費を稼ぐ。高校を中退し、町の大衆食堂の厨房で働き、今はその食堂で料理人として朝から晩まで働いた。医学の知識もなく、他に娘に何もしてやれない今の俺に出来ることを必死にやった。娘が元気になることを信じて、娘の元気な笑顔が見られることを信じて

「ばば……」

唯の目がうつすらと開いた。

「唯、パパはここにいるぞ」

唯の手をとり、声をかける。

「ばば……。ここ、……夜なの？……まっくら……」

今はまだ昼過ぎ、カーテンは閉めているものの日差しで明るいも
かかわらず。

目が

「っ
っ」

唯の言葉に奥歯をグツと噛みしめ、

「唯、そうなんだ。今は真夜中なんだよ。パパのこと、わかるか？
声が震えないように、そつと、そつと声をかける。」

「・・・うん」

焦点の合っていない目でこちらを向こうとする。声のする方を向い
たという感じた。

「ぱぱ・・・あのね・・・、ぱぱと・・・もつと・・・おはなしし
たかった・・・。ぱぱと・・・あそびたかった・・・。」

唯

考えてみれば、唯は産まれてすぐに母親を失い、親は俺だけだった。
幸の母親が母親代わりだったが、代わりだ。親じゃない。俺だけだ
ったのに。唯と顔を合わせるのは、朝から幼稚園に送るまでと幼稚
園のお迎え、夜の少しの時間だけだった。休日もほとんど仕事だっ
た。

俺は、生活のためと仕事に明け暮れ、満足に遊んであげられなかつ
た。構ってあげられなかった。

唯の手を両手で握りしめ、唯に声をかける。

「それじゃ、唯。元気になったら動物園行こうか。唯、行きたがつ
てたよな。暖かくなつた海でもいいぞ、唯」

そつと声をかけているつもりだったが、後のほうは懇願に近いもの
だった。

唯はわかっているんだ。俺と過ごせる日が、もう長くない」とを

「ぱぱ……あのね……」

弱い呼吸で唯は言葉を続ける。

「……だいすき……」

弱弱しい言葉でもはっきりと俺の耳に届く。

「唯っ」

神様

「唯、パパも大好きだぞ」

その言葉に唯がかすかに微笑んだ。

「えへへ……」

微笑みが消えると、ゆっくりと唯の目が閉じられる。わずかに保っていた唯の頭や手の力も抜けていく。

神様、この世界にいるのなら、いや、この世界じゃなくても助けてくれ。唯を、唯を助けてください。

『助けたいですか？その娘を』

ベッドの唯にしがみつき、声なき声をあげていた俺に響いてきた言葉だった。

プロローグ（後書き）

はじめまして、さら と申します。

拙い文章にもかかわらず、ここまでお読みいただきありがとうございます。
います。

女神の選択（前書き）

2話目です。

表現の仕方が難しかったのですが、深層世界といいますが、精神の世界です。

神様との邂逅シーン。

女神の選択

2・女神の選択

顔を上げ、目を開くと世界は真っ白だった。何も無い世界。そんなところに俺はいた。先ほどまでしがみついていたはずの唯の姿も見えない。身体感覚もあやふやだ。

こころは・・・？

『この子を助けたいですか？』

頭に響く女性の声、とても澄んだ声で心地よい。だが、その余韻に浸る間もなく、叫ぶように声を上げた。

助けてくれっ！

『この子の命の灯は消えかかっています』

っ

『この子は、もう、この世界で生きていくことはできません。ですが、私の世界ならそれも可能です』

助けてくれっ！娘が助かるなら俺はどうなっても構わないから！

頭で考えた言葉ではなく、心の声を高らかに叫ぶ。唯がまた元気になってくれるなら、俺自身は本当にどうなってもいい。結果的に唯を悲しませることになるかもしれないが、それでも強く思った。

『貴方も一緒です。この子を助けますが、貴方は私の世界で“貴方ができること”をなさってください』

俺にできること？

『そうです。それが何かは、貴方が私の世界で考えてください』

そんなことで・・・

そんなことでいいのか？ようやく頭が働いてきた。しかし、娘を助ける代償が“俺にできること”をするって・・・。

『これは選択です。このままこの世界で貴方は生きていくこともできます。この子は諦めていたただかなくてはなりません』
ようやく働き始めた頭が、また、この一言で停止した。

唯を助けてくれっ！

思いのままに叫ぶ。今の望みは、唯一の望みはそれだけだから。

『・・・わかりました。思いは強いようですね』
その言葉に安堵した。これで唯は助かるんだ。何の保証もないにもかかわらず、そう思った。

幸いというか、唯以外の身内と呼べる存在がないので、唯が一緒のようだし、この世界に心残りはない。職場の仲間もいることはないのだが、唯の命と引き換えと言われればそうも言ってもらえない。

そういえば、このところ幸の墓参り行ってないな。まあ、幸も理解してくれるだろう。唯のためなんだから。墓前に報告できなくて悪いが、仕方ないだろう。

それにしても、あなたの世界？

『そうです。こことは別の世界。人が生きる別の世界です』

俺ができること？

高校を中退して大衆食堂で働いただけの俺には、できることなんてほとんどないと言っていい。強いてあげるとすれば、料理ぐらいか。仕事でやってたからな。料理人の端くれとして、人並み以上にできることと言えばそれぐらいか。異世界で料理屋でも開くか。異世界にもこの世界のような食材つてあるのかな。まあ、人が生きる世界だから大丈夫か。

『1年後、貴方が何をなさったか確認しましょう』

つらつらと思考に浸っていると、また、頭に声が響いてきた。そうだ、これは代償……。唯の命と引き換えなんだ。適当に考えていいものじゃないんだ。俺ができることを必死に考えないと。

しかし、もし俺が代償を支払えないと唯はどうなるのだろうか？引き換えは唯の命。まさか……

もしも、もしもだ、俺が、その、何もできなかつたら？

『……すべては無かったことになります。今この時点に戻り、この世界で貴方は生き続け、この子の命はここで失われます』

っ

やはり、そういうことなのか。身体感覚がないのに、冷や汗が流れたような感じがする。

考えろ、俺にできること。何ができる？これまで唯に何もしてやれなかったんだ。今、唯の父親として俺にできることを考えるんだ。

なあ、幸。俺って何ができるんだろうな。唯の命がかかってるのに、何もできないのか？

なあ、唯。パパは何ができるかな。唯に何もできなかった俺にもできることがあるかな。

『先ほども言いましたが、何ができるかは私の世界を見て、考えてはいかがでしょうか？』

ごもつともです。

示すべき相手に助けられてしまった。ガツクリと気を落とす俺に、
『そろそろ時間になります。よろしいですか』

ああ。唯を、唯を助けてくれ。

『わかりました』

その言葉とともに真っ白なだけだったこの世界に強い光が差し込む。眩い光に無意識に目を閉じてしまう。

そのあと少し間があった。目を瞑ったままでも、強い光を感じる。

再び、女性の声が響く。

『……………選択はなされました。……………ようこそ、我が“デイト

ネシア”へ・・・”

その言葉を最後に俺は意識を失った。

『尊さん、楽しみにしていますね』

尊にそんな言葉が届いていたのだが、意識のない尊は聞くことができなかつた。

女神の選択（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

女神・ディオネ登場です。・・・が、女神様、名のついていませんね。神様の表現と尊の表現が微妙に違うんですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6498z/>

異世界の料理人

2011年12月25日00時45分発行